

20 ブルガリアにおける日本研究

ツベタナ・クリステワ（ソフィア大学）

110年ほど前、5世紀にわたるトルコの圧制が終わりに近付いたころ、ブルガリアの有名な詩人であるプリスト・ボテフは次のように訴えました。「ブルガリアはできるだけ早くヨーロッパへの道を辿らなければならない。間に合わなければ、永久に日本と並んで、発展不十分な国となる」。

約20年後にもう1人の有名な作家、イワン・ワゾフはこれとまったく逆の態度を表しました。すなわち、「アジア諸国のうちもっとも成功できるのは日本人であるに違いない。政府も国民も同様に進歩的な精神に導かれているからだ」。

それは、何といても、まことに予言的な発想であったのですが、あいにく、その動機となったのは、日本におけるローマ字への運動でした。つまり、同じくヨーロッパの文化パターンに基づいている価値観です。

当時のブルガリアの一番代表的な2人の作家が日本へ目を向けたのは、少しも珍しくないと思います。なぜかと言うと、19世紀末のブルガリアと日本との運命には共通点が少なくないからです。両国とも、つまり、およそ200年の鎖国時代直後の日本も、5世紀にわたるトルコ圧制直後のブルガリアも、ヨーロッパを中心とする外国の文化を次々と取り入れようとしたわけです。

1906年には日本文学の最初の翻訳が出版され、それは徳富健次郎（蘆花）の『不如帰』でした。重訳で、“Nami-ko”という題名です。浪子の悲しいストーリーは当時の人の心を強く感動させて、長い間ブルガリアにおける日本の女性のイメージはその名と結び付けられていました。似ている事情のなかから生まれてきた当時のブルガリア文学の女性主人公をよく連想させたからでしょう。でも、残念ながら、その最初の出会いは日本研究の動機にはなれなかったのです。それ以来、日本への興味は、あらゆる政治的、および経済的な状況に従いながら、高まったり、消えたりして、ネグレクトと憧れとの間で揺れていました。

しかしながら、詩人のボテフの発言から日本研究の始まりまでには、「早いものに」と言うよりも、「ものすごく遅いものに」100年以上の月日が経ちました。

これから、この遅れてきた研究者達の問題について少しばかり考えてみたいと思います。

でもその前に、日本研究とはいったい何であるのかという問題を簡単に取り扱いたいと思います。これはこの日文研の問題点の一つでもあると思われるからです。

日本研究という言葉には狭い意味と広い意味が含まれていると思います。狭い意味では、日本の文献も使用される研究のことを指しています。すなわち、日本語能力を必要とする様々な分野における研究のことです。あるいは、言いかえれば、それは直接法の研究です。

広い意味では、日本に関するあらゆる事実や概念などを含むもっと一般的な研究を指しています。すなわち、日本語能力を必要としない研究のことです。言いかえれば、間接法の研究です。

段階的には広い意味での研究が先にくると思いますが、狭い意味での研究が発展しないかぎり、全体の研究の学問的な役割も疑問に思われると言えるでしょう。

ですから、私はここで、ブルガリアにおける日本研究の問題を段階的に、つまり、広い意味での研究から狭い意味での研究へと、おおよそながら考察させていただきます。

研究の基礎、あるいは、その結果の表現になっている、日本についての出版物を次の3つにわけて取り扱いたいと思います。すなわち、①日本を紹介する本、②日本文学の翻訳、③教育と専門研究、という3つです。

ブルガリアで出版された日本を紹介する本は、日本の政治、経済、地理、社会、文化、日常生活等の分野に触れていて、そのなかには紀行文や外国語からの翻訳も少なくありません。ブルガリア人によって書かれた本と外国語から訳された本は、あわせて100冊以上もあります。

最初の本、『日露戦争と国際法』という本は、1904年に出版しました。一番新しい本は、1989年に出版された『日本・さむらいの刀から人工インテレクトまで』です。

全部の100冊以上の本には触れられませんし、触れる必要もないでしょう。ですから、ここで一番話題になった本を簡単に紹介しましょう。

1972年に初版（1987年に再版）されたミラン・ミラノフ氏の『日本ノート』は注目すべき本の一つだろうと思います。著者は1970年、大阪万博の時に、1年間ぐらいブルガリアの代表として日本に滞在し、帰国後、日本の高度成長のシンボルになった大阪万博をはじめとする日本の印象をまとめて本にしたのです。執筆動機は日本の高度成長の要因を探ることなので、本の中心になってきたのは、経済、政治、社会、歴史等の問題です。他の人の本を参考にして、著者自身の発見とオリジナル・アイデアがほとんどないと言っても過言ではないのですが、そのつもりはなかったようです。「私にとって日本という国は真珠を作る貝と同じです。真珠が見られるには、それを貝から取り出さなくてはなりません。でも、そうしたら、貝を殺すことになるのです」とは、本の最後の言葉です。

一方、1985年に出版された『日本、そのまま』という本の著者、ジャーナリストのマルコ・セモフ氏は「貝を殺す」おそれをぜんぜん感じていなかったらしいです。日本滞在中も1週間ほどと短かったし、参考本もあまり使わなかったからでしょう。日本は、警察官等のような公務員以外の人は年金をもらわないって。日本のサラリーマンは普段仕事が終わってから、スーパーで買物をして、買物の袋を持って「トルコ」へ行くんですって。こういう“発見”は外にもいっぱいあるのですが、これで遠慮させていただきます。私の知り合いで、ブルガリア語のできる日本人がその本を読んで、著者に決闘を申し込もうとするほど、怒ってきたのです。

あいにく、『日本、そのまま』という本は、今まで出版された日本の紹介の本のうちでは、一番成功したものです。今年再版されましたし、発行部数も一番多いのです。なぜかと言う

と、著者が日本の事情を背景にして、ブルガリアの政治、経済等の欠点を批判しているからでしょう。政府によって出版を禁止されたという噂さえも一時広がったので、それは言うまでもなくすごい宣伝になりました。結局、この本は『日本、そのまま』と言うよりも、「ブルガリア、そのまま」のように読まれて、読者に反響を呼び、大変うけたのです。

話題になった本のもう一つは、ナチョ・パパゾフ氏の『日本・さむらいの刀から人工インテレクトまで』（1989年）です。それは一番詳しくて、参考本の付録も付いているのです。日本の経済、科学、技術等における飛躍的な進歩の要因を追求しながら、日本の先端技術、品質管理、生産の運営等の問題が取り扱われています。著者は駐日ブルガリア大使をしたこともあるし、長い間ブルガリア・日本経済協力委員会の会長もしていたので、情報もたくさん持っていたのでしょう。それにしても、彼の本は思ったほどには成功しなかったのです。マスコミに誉められたにもかかわらず、読者にはあまり読まれなかったわけです。その理由は著者の政治的な地位にあるように思われます。つまり、本が出た時に著者は共産党の政権の要人の一人だったのですが、国民の間にはその政権への不満が我慢できないほど高まってきたというわけです。

日本を紹介する本は直接的に日本研究には属さなくても、少なくとも研究の背景を作るには貢献できると言えるでしょう。つまり、一般的な情報が普及されると、より専門的な問題への関心も現れてくるわけです。

しかし、もしこういう本に間違いがたくさんあれば、それは日本への理解というよりも、日本への誤解をもっと深くする恐れがあります。

はっきり言いますと、ブルガリアで出版された日本の紹介の本は、日本研究への門を開くという役割を完全に果たせなかったと思います。なぜかと言うと、次のような理由が挙げられると思います。

日本を紹介する本は、日本への関心を高めつつあり、日本への関心が高いことから生まれてくるのです。つまり、社会の要求への答えとして出てくるのです。ですから、紹介する国というよりも、出版する国の政治的、経済的、社会的、思想的、文化的等の問題と密接に関連していると言えるでしょう。そのために、『日本、そのまま』のような本は、「ブルガリア、そのまま」の本になりうるのです。

もう一つの理由は著者は日本知識が不十分なためです。たとえ、まじめな人であっても、またまじめに他の本をたくさん読んでも、どれが一番重要であるか、どれが代表的な特徴であるか、そういうことが分からなければ、足りない部分も、欠点も、誤解等も生じてくるでしょう。

日本の紹介の本を書くのはやさしく見えるのですが、日本の知識を深くすればするほど、こういう本は書けなくなると思います。日本に4、5日ぐらい滞在した人は本を書いて、2、3週間ぐらい滞在したら、いくつかの記事を書いて、数か月滞在したら、記事を1つぐらい書いて、もっと長く滞在したら、何も書かない、と日本学者の間ではよく言われていることです。日本と日本研究に一生をかけた人だけが書けるのでしょう。ですから、こういう人が現れないかぎり、欠点だらけの本の出版は避けられないことでしょう。

それ故に、日本研究の歴史があさいブルガリアでは、日本の紹介には、日本を直接に紹介する本よりも日本文学の翻訳の方が貢献してきたと考えています。訳された文学作品そのものはもちろん、詳しい前書きも日本文化の理解への鍵になってきたと思います。

日本文学の翻訳にも2つの段階があると言えます。一つは重訳の段階で、もう一つは日本語からの翻訳の段階です。

重訳の段階で一番注目すべきものは、ニコラ・ジェロフ氏の日本ポエトリの翻訳であると思います。彼は3冊の本を出して、3冊とも再版されました。『青い時』（初版1922年）は4回出て、『大和の歌』（1937）と『咲いた枝』（1938）は2回ずつ出版されました。その3冊には、『万葉集』から与謝野晶子の詩までの日本の代表的なものが入っており、当時のブルガリアの詩人達に影響を与えたそうです。重訳なので、和歌が長歌になったり、俳句が新体詩になったりする例も少なくないのですが、全体として日本のポエトリの雰囲気をよく伝えていきます。

オリジナルからの最初の翻訳は1977年に出版された川端康成の『雪国』と『千羽鶴』（ボイカ・エリトワとゲオルギ・ストエフ訳）です。あれから13年ばかり経ちましたが、このような短期間にただ数人の翻訳者の力でおおよそ40冊ぐらいの翻訳書が出てきたのは、記録的なことと思われます。翻訳されたもののなかには、現代文学の小説が一番多いですが、古典文学の翻訳さえもあります。翻訳のリストが付けてあるので、ここでもっとも代表的な翻訳書と翻訳者、及び、翻訳活動の主な傾向と問題点等を簡単に紹介させていただきます。

翻訳活動の特徴の一つは選択です。選び方は、よく売れるというよりも、日本文化を代表するという原則に基づいているので、選択の中心になってきたのは、いわゆる純文学です。たとえば、川端康成の『山の音』（ドラ・バロワ訳）と『美しい日本の私』（ツベタナ・クリステワ訳）、有島武郎の『或る女』（ベラ・ブトワ訳）、芥川龍之介の『闇中間答』『河童』『歯車』『或阿呆の人生』等を含む選集（バロワ訳）、谷崎潤一郎の『春琴抄』『刺青』等の選集（ブトワ訳）、夏目漱石の『こころ』（バロワ訳）、志賀直哉の『暗夜行路』（ネリ・チャラコワ訳）、井上靖の『通夜の客』『闘牛』等の選集（バロワとブトワ訳）、井伏鱒二の『黒い雨』（バロワ訳）、遠藤周作の『海と毒薬』（バロワ訳）、太宰治の『斜陽』（クリステワ訳）等が挙げられます。

現代作家のうち、一番よく訳されたのは、たぶん安部公房でしょう。『他人の顔』（バロワ訳）、『燃えつきた地図』（ルジツァ・ウグリノワ訳）、『砂の女』（1991年出版予定）のような長編小説と同時に、雑誌に載せられた短編も多いし、『友達』（バロワ訳）という戯曲は今年の3月にソフィアのある劇場で上演されて、それは日本の戯曲の初上演となりました。安部公房がブルガリアでそんなに有名になってきたのは、2つの理由があると思います。その一つはいうまでもなく、安部公房の作品が全世界の人々に訴えているということにあるのですが、もう一つの理由としてソ連における出版活動の影響が挙げられると思います。つまり、ロシア語への翻訳が数多く出たうえ、ブルガリアにはロシア語の本屋がたくさんあったため、大勢の人に読まれて、出版社の人も読者もブルガリア語への翻訳を期待するようになってきたわけです。

長い間ブルガリアのさまざまな分野において、ソ連への依存があり、翻訳活動も例外ではなかったのです。禁止された本はその例の一つであったと言えるでしょう。幸いに、日本文学のなかに禁止された作品はほとんどなかったのですが、例外は、三島由紀夫です。彼の最初の翻訳、『金閣寺』（バロワ訳）は去年やっと出版されました。

もっとも有名な作家と作品を翻訳するのはもちろん、できるかぎりロシア語をはじめとする他の外国語には訳されていない作品を翻訳しようとするのが、この遅れてきたブルガリアの翻訳者の原則の一つになっています。その例として『秋風記』という題名の日本現代文学の短編集（クリステワ編集）を紹介させていただきます。その本には、他の言葉に訳された短編（林芙美子の『晩菊』、安岡章太郎の『ガラスの靴』、丹羽文雄の『厭がらせの年齢』、遠藤周作の『肉親再会』、大江健三郎の『他人の足』、有吉佐和子の『地唄』）と並んで、はじめて外国語に翻訳されたと思う短編（太宰治の『秋風記』、大岡昇平の『神経さん』、志賀直哉の『好人物の夫婦』、井上靖の『道』）も入っています。

日本現代文学のブルガリア語への翻訳が数多く出版されることに、一番大きく貢献してきたのは、ドラ・バロワ氏に違いありません。彼女は1981年から「ナロドナ・クルトゥーラ」という外国文学専門の出版社に勤めていて、自分でもたくさんの翻訳をしたり、他の人にも仕事をさせたり、日本文学の翻訳が出版社の計画に入るように、一生懸命に努力したりしてきたのです。

現代文学の翻訳に比べて古典文学の翻訳がまだ少ないのは、当然のことと思われます。一番大きな理由は翻訳者が1人しかいないということです。古典文学の翻訳も現代文学と同じような原則に基づいているのです。すなわち、①オリジナルから翻訳すること、②代表的な作品であること、③できるかぎり、他の外国語にはあまり翻訳されていない作品を選ぶこと、④作者と作品、及び、当時の文化の特徴を紹介する詳しい前書きを付けることなどです。たとえば、1985年に出た清少納言の『枕草子』が英語にも、ロシア語等にも翻訳されているのに対して、ブルガリアにおける日本古典文学の最初の翻訳になった後深草院二条の『とはずがたり』（1981年、クリステワ訳）は、日記文学の代表的な作品であるにもかかわらず、日本にも未だによく知られていないようです。

最後になりますが、ブルガリアにおける日本文学の翻訳のもう一つの特徴を指摘しておきたいと思います。それは発行部数のことです。今までブルガリアでは翻訳文学がかなり多く読まれてきたのはなぜか、という問題は別として、日本文学への関心はまことに信じられないほど高かったということを強調しなければなりません。約900万人の人口のあるブルガリアでは、日本文学の本は4万部ぐらいいで出たり、それに、短い間に売り切れになったりしてきたのは、珍しく思われるでしょう。『とはずがたり』のような古典さえベスト・セラーになったのも、その証拠の一つとして挙げられます。

日本文学の翻訳が果たした役割は、2つにわけて考察できると思います。一つには、それが日本文学を初めとして、日本人の日常生活、日本人の考え方を直接に紹介してきたことが挙げられます。もう一つには、翻訳を通じて日本についての情報が重なってきて、それに基づいて専門的な研究も可能になるというような役割もあるのです。たとえば、『とはずが

たり』の翻訳が出たら、日記文学の特徴についての論文を理解できる人も現れてくるでしょう。一方、翻訳をするには、テキストを詳しく調べなければならないので、それは結局、研究の出発点にもなりうるのです。

ブルガリアにおける日本研究、狭い意味での研究を紹介する前に、それに関連しているいくつかの問題に触れたいと思います。

一番大きな問題は次のように思われます。つまり、簡単に言えば、ブルガリアでは日本研究が最近始まったばかりであるのに対して、世界には日本研究の歴史の長い国々もあるので、そのため、ブルガリアにおける日本研究には2つの道があると思います。その一つは、ブルガリアは何も知られていないから、どんな研究でもいいという考え方に基づくものです。しかし、それは、遠慮せずに他の人が書いたことを繰り返して、plagiarism だらけの論文と本を書く危険をはらんでいるのです。残念ながら、このような論文や本さえも、ブルガリアではもう出ていますが、その題名と著者の名前は、ここでは遠慮させていただきます。なぜかと言うと、著者自身が自分のやりかたが正しいと考えているかも知れないからです。

もう一つは、ブルガリア国内だけではなく、幅広い日本学者の世界に、およばずながら貢献しようとする道なのです。それはどうやって実現できるのか、という質問に答えるために、最初にブルガリアの日本学者が直面している問題点、または研究の相手等について少しばかり考えてみたいと思います。

問題点は、次のように思われます。つまり、①日本についての情報と知識が足りないこと、②研究の基礎になりうる日本研究の伝統がないこと、③日本研究者の数が少なくて、それに、みんながそれぞれの分野での研究を進めているので、ディスカッションの場になりうる研究サークルがないことです。

しかし、伝統がないということは必ずしも悪くはないと思います。なぜかと言えば、伝統がなければ、昔の authority への依存もないし、ぜひとも守らなければならない研究パターンもないので、研究の自由があるわけです。これは何よりも先ず、研究方法の自由を意味しています。でも、このような自由にも制限があり、それは主として、研究の目的と研究相手等に関連しているように思われます。

聞く相手か読む相手がいないければ、研究がどんなに優れていても、砂漠のなかでの独り言になるのですね。

さて、ブルガリアの日本研究者はだれを相手にできるのでしょうか。一つにはもちろん、日本をはじめとする外国の日本研究者です。その意味では、日本への留学、国際会議への参加等はブルガリア人の日本研究を支えるために重要な役割を果たしていると強調しなければならないと思います。それらはディスカッションと意見交換の場になってくるからです。この関係で今まで私達にもっとも協力してくださったのは、国際交流基金とヨーロッパ日本学研究協会(EAJS)です。

しかし、こういう所で他の国が作り出した日本学の伝統的なアプローチを真似したら、面白くもないし、申し訳ないことにもなります。

一方、ブルガリアではまとまった日本学会がないので、相手になりうるのは一体だれなのでしょう。他の言語、文化、歴史、社会学等を研究している人しか相手はありません。でも、そのような人達と対話できるためには、共通語を探さなければなりません。

以上に述べられたような研究相手の2つの特徴を調和させて、結び付けられるのは、現代理論 (modern theory) に基づくアプローチであると思います。つまり、ヨーロッパの文化パターンを中心とするアプローチの制限を乗り越えようとしている理論のことです。

このようなアプローチを使うなら、日本学の研究の歴史がある国で発表をしても面白いし、ブルガリアでも理解される可能性が増えてくるでしょう。それに一番大事なのは、このアプローチによって、世界の文明を背景に日本文化の特徴を明確にさせるために貢献できるのです。研究の意味は結局そこにあると言えるでしょう。アメリカのような日本学の伝統がある国々でも現代文化論が最近日本研究にも応用されるようになってきたのも、このアプローチの応用性の証拠の一つとして挙げられるでしょう。

研究の内容を紹介する前に、もう一つの視点からこのアプローチのメリットを考えてみたいと思います。それは理論に挑戦することになります。つまり、変形文法、構造論、記号論等のような現代文化論はヨーロッパの文化パターンの影響を逃れようとしても、研究の基礎になっているのは、主として西洋のテキストなので、異なった文化の特徴が説明できる「間」が残っていない場合もあるのです。したがって、それがかならずしも日本研究へ直接に応用できるわけではありません。理論をおよぼさながら考え直す必要が現れてきて、今後、日本文化研究は現代文化論の発展にも貢献できるのです。

以上のような研究の目的に達するには、ブルガリアの日本学者は母国語だけではなく、英語をはじめとする国際語でも自分の研究論文を書かなければならないので、言いたいことを全部スムーズには言えない場合もありますが、それしか方法がないようです。

これから、ブルガリアの日本学者が追求してきた主な研究テーマを簡単に紹介させていただきます。

文学—日本の日記文学、随筆とヨーロッパの自伝、エッセイとの比較研究、「物語のできはじめ」である『竹取物語』の pattern of signification、『とはずがたり』と『源氏物語』との intertextual relations、日記文学における文芸時間 (Gerard Genette に基づいて)、アリストテレスの論を初めとするヨーロッパの暗喩論 (メタファー) と日本文化における暗喩、originary metaphor としての和歌における「袖の涙川」の表現 (Derrida に基づいて)、世界文化における主な文化パターン (「文法向き」のパターンと「テキスト向き」のパターン、Y. Lotman と U. Eco に基づいて) 等の研究です (ツベタナ・クリステフ)。

言語学—日本語とブルガリア語との音韻論的な比較研究、日本語の音韻論的な特徴—音素と音節について (ブラティスラフ・イワノフ氏)、日本語の動詞の活用タイプ (イワノフ氏とエレオノラ・ヨフコワ氏)、日本語の授受動詞の機能と意味 (ヨフコワ氏) 等の研究です。

日本の現代史と社会学—日本社会における女性運動、日本の現代社会における科学・技術革新と伝統文化との問題 (ネリ・チャロコワ氏)、日本と東南アジア、日本と中国との関係の現状と見通し (ボリャ・アルギロワ氏) 等の研究です。

ブルガリアの日本学者と日本文学の翻訳家達等の共通問題として、日本語のことばと名前等をブルガリア語文字に写す方法の問題が挙げられます。これは音韻論的な問題でもあり、文化的な問題でもありますから、共同研究の論文も出ています（イワノフ氏、シルビア・ポポワ氏、クリステワ）。トランスクリプションの問題は、何よりも先ずそれぞれの国語の特徴と関連しているのですが、国際的な共通点も少なくないのです。たとえば、日本人の名前の順序がそのなかの一つです。つまり、名前と姓とではどちらを先に書かなければならないのでしょうか。色々な外国語の本を見ても、それはめちゃくちゃな状態です。日本研究の伝統をもっている国々では何らかの基準があるかも知れませんが、ブルガリアでは問題だらけなのです。芥川龍之介はそのままでもいいけれども、三島由紀夫は由紀夫・三島でも差し支えないというようなやりかたにはどんな学問的な根拠があるのでしょうか。しかし、こういう行き詰まりになったことには、外国の研究者のみならず、日本人にも責任があるのではないかと思います。

さて、ブルガリアにおける日本学の中心となってきたのは、ソフィア大学の日本学科です。その他には、科学アカデミーに属している研究所にも幾人かのジャパノロジストが勤めています。しかし、ソフィア大学に勤めていない人達も非常勤の講師として日本学科の仕事に協力しているのです。現在ブルガリアの一番優秀な日本研究者は、力を合わせて、ある程度は自分の研究も犠牲にして、日本語と日本文化の教育に、全力を尽くしているのです。そのきっかけになったのは、1990年9月にソフィア大学で日本学科が独立したということです。

ブルガリアで日本語の教育が始まったのは1968年です。それはソフィア大学での夜間講座でした。ソフィア大学の学生に限らず、他の大学、研究所、会社等をはじめとする一般の市民も参加できるような仕組みになっています。そのため、参加者の数はきわめて多く、日本への関心の増大とともに増加してきたわけです。毎年少なくとも100人ぐらいの希望者がおり、200人以上もきた場合もあります。しかし、3年間の講座なので、最後まで勉強しつづける者は1割ぐらいです。従って、この夜間講座は日本語と日本文化の普及には重要な役割を果たしているのですが、効率が低いため、日本研究の発展にはあまり貢献しているとは言えないわけです。

日本学科は古典・新フィロロジーの学部が付属しているので、教育は学部のパターンに従わなければならない規則があります。つまり、フィロロジー（言語と文学）の学部なので、日本学科の中心になっているのは、日本語と日本文学です。しかし、日本関係の教育は他の所では行われていないので、日本語と日本文学のみならず、日本の歴史、宗教、哲学等も教えられています。

ブルガリアにおける大学教育システムは日本、アメリカ等の教育制度とは違いますが、主な違いに簡単に触れてみたいと思います。

学部教育は5年間で、B. A. と M. A. とは一緒になっています。教育課程は3つの段階にわけられています。第1の段階で言語学論、文学論等のフィロロジーの基礎的な知識（必須科目として）を受けて、第2の段階で日本語や日本文化等について基礎的な知識（同じく必

須科目として)を受けて、第3の段階で4つの分野(日本語の言語学、日本文学、日本文化、日本の社会論)からどれか1つを選んで、専門別の知識を受ける仕組みになっています。必須科目と選択科目と同時に、日本学科の学生は1年生から5年生まで日本語もずっと勉強することになっています。1年生は週に14時間、2年生、3年生と4年生は10時間ずつ、5年生は週に6時間です。希望したら、他の学科と学部の講座も受けられるのですが、ひまがあまりなさそうです。最後に、ジャパノロジストとしての卒業証を受けるために卒業(M. A.)論文も書かなければなりません。

以上のような大学教育システムはきつく感じられるかも知れませんが、学生に面白くて価値の高い教育を受けさせるには、先生達は大変苦勞しなくてはなりません。必修科目の内容を面白くしたり、選択科目を多様化したりするためには、非常な努力が必要なのです。幸いに、スタッフの人はまだ若くて、全員、常勤も非常勤も同様に熱心に仕事をしています。

次に日本学科のスタッフを簡単に紹介いたします。

- Dr. Tzvetana Kristeva—日本学科の主任教授

(日本語の文法、現代文化と文学の理論、日本古典文学、古文、日本学入門等)

- Dr. Lyudmila Holodovich—専任講師(一等)

(日本語、現代日本文学等)

- Mrs. Silvia Popova—講師(二等)

(日本語、現代日本事情等)

- Mrs. Eleonora Yovkova—Shii—講師(三等)

(日本語、言語学論等)

- Mrs. Dora Barova—非常勤講師

(日本語、翻訳等)

- Mr. Bratislav Ivanov—非常勤講師

(日本語の言語学論、日本語の歴史)

- Dr. Nelly Chalakova—非常勤講師

(日本の歴史)

- Dr. Volya Argirova—非常勤講師

(日本の政治と国家機構等)

そして、last but not least、国際交流基金から派遣された真崎光晴先生です。

去年の9月に入学した日本学科の“初”学生は9人しかいませんが、彼等が卒業したら、日本語と日本文化の教育や日本研究等も一層普及されるでしょう。

そして、それが実現できるまで、ソフィア大学では、一般の市民向きの夜間講座と優秀な学生向きの日本学科とで、数人のジャパノロジスト達が努力しつづけるしか方法がないのです。